

ふるさと奥尻通信

平成24年6月15日
奥尻町教育委員会発行
事務局:01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭語

今年も賽の河原祭りの日がやってきます。これは元来、海難受難者や水子供養のために始まった、地元の供養祭であり、観光色が強くなった今日でも、奉納相撲が継続して行われています。

特集 稲穂灯台の歴史 ー火薬庫のレンガ基礎発見！ー

6月の奥尻島は、濃霧に覆われる日があります。濃霧の日は飛行機が欠航し、防災無線にて「奥尻発〇時〇分の航空機は、奥尻空港悪天候のため欠航となりました」と放送が入り、皆ガックリ…。こういう天候の時に稲穂岬や青苗岬の灯台が活躍します。現在ではGPS搭載の船ばかりですから、座礁・転覆という海難事故はめったに起きませんが、それらが開発される以前(江戸期～昭和中期)は、濃霧による事故が多発していました。稲穂岬に賽の河原として供養の場が出来たことからも、海難事故の多さが想像されます。

北海道庁によって稲穂岬の灯台が整備されたのは明治22年のことで、同24年12月に初点灯しました。当初は二重芯ランプだったのを三重芯ランプに改良し、大正4年に石油ガス化式灯器に変更、昭和27年に電化されて1kw電球に取り替えられました。点灯以来、長らく灯台守が常駐し、運用・保守管理がなされていましたが、昭和57年より機械の自動化がなされ、翌58年から無人化しました。通常、灯台の形状は円柱型ですが、稲穂の灯台は四角いために、全国的に珍しいようです。

灯台の四角い建物には、窓が1つ付いていますが、これは北方照射塔が併設されているためです。夜間は北をまっすぐ指した光線が伸びており、約1km先の反射板を照らしています。この付近には暗礁があり、数々の海難事故が発生した難所でした。



現在の稲穂灯台(3代目)

☆稲穂灯台の歩み☆

明治24年	1891	灯台竣工
明治35年	1902	光源、三重芯ランプ
明治36年	1903	霧信号業務開始
大正4年	1915	光源、石油ガス化式
昭和4年	1929	霧笛、サイレン式
昭和27年	1952	建物改築、光源変更
昭和36年	1961	青苗へ事務所移転
昭和46年	1971	北方照射塔設置
昭和57年	1982	建物改築、自動化



初代灯台 昭和12年



2代目灯台 昭和43年



火薬庫のレンガ基礎



稲穂寄燈台用地の標石

レンガの積み方

稲穂のマッカ岩の下には「稲穂寄燈台用地」と刻まれた石柱が建っています。当時はここまでが灯台用地の境界線だったのでしょう。さらに、灯台とマッカ岩の間には、レンガ建物の基礎が残っているのを見つけました。島内には、奥尻鉱山関係を除いて、レンガ建物がほとんど無いため、非常に珍しい発見となりました。稲穂地区の水野哲雄さんに伺ったところ、灯台に霧笛ができる前は、火薬を爆発させて“ドンッ”と大きな音を出して航行船に位置を知らせており、その火薬を保管するための火薬庫であったことが判りました。火薬爆発による霧信号業務は、明治36年より開始され、当初20分毎に1回、後に10分毎に1回へ変更し、昭和4年に圧搾空気によるサイレン式に変わったまで続けられました。火薬庫の上屋は、津波以前から完全に壊れており、レンガ基礎も半分ほどしか残っていません。それでも後の津波被害に遭っても残るほど、基礎が頑丈な造りだったことになります。他に通風口らしきものが2個あり、鉄扉が付いていたと思われる蝶番が残っていました。これらも奥尻の近代史を物語る証人ですので、大切に記録・保存していきたい遺構です。

島内では5月中旬から田植えが始まりまして、米岡、富里地区の水田では農家の皆さんが一家総出で作業していました。”奥尻島で米が穫れる”あまり知られていないことですが離島では最北、すなわち、世界的にも最北にあたる稲作地帯なのです。この離島での米作りは歴史が古く、明治20年代までさかのぼる記録があります。離島の米作りの歴史については今後特集を組みますが、今回はちょっと昔の稲作の道具を紹介します。

現在の稲作は機械化されていますが、かつてはほとんどが手作業でした。田植え後の作業の中で、長時間の労働となったのが田んぼの草取りです。雑草は毎日どんどん伸びていきますから、せっせと除草しないと追いつきません。そこで開発・改良されたのが、株間除草機です。大きさや形態は様々ありますが、稻穂の資料室には2種展示されています。稻株の間を走らせて回転した刃が雑草を抜いていく仕組みです。昭和30年代前半に普及しました。



株間除草機



爪が回転して草が取れる仕組み

月刊 奥尻のつり 6月号

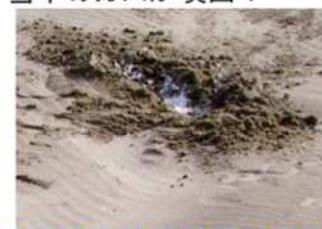
春の釣りシーズンも6月いっぱい一段落。お魚さんはだんだん沖の方へ行ってしまい、陸から仕掛けを投げても届かないなあ…。先日、奥尻港の沖堤に初めて船で渡りまして、ちょっと特別な釣りの時間を楽しみました。防波堤の外へ投げた昼間はほとんど釣れず。夕方からはフェリー、イカ釣り船の通過した後の船道へ投げたところ、カレイ、ホッケ、アブラコがポンポンときましたよ！



奥尻これなんだろう？ 第3回

先日、親子ふれあいフィッシング大会が奥尻港で開催されました。釣り上げられた魚のなかに、なんだか気持ち悪い生き物が！指の太さほどの大きさで、イソメのオバケみたいな感じ。さてこれは何者だ！？

先月の答え：砂の下は雪。雪中のガスが噴出？



あして尻でで 日た 真り道り北
りて、町を、々。が抜南日斗
が活ま史収被のこれ 大き西本市
と用た研録災 生は量帖沖海在
うで防究しか活 ごき災のたらに被寄青震部の
ざる教一も復迫災 も育次の興わ者地高
いも育次の興わ者地報震津
まとの資でにれ自地報震津
しで教料す至る中が 古事北氏
たす材と。る身まし古事北氏
。。とし奥ま



板まよた書の修達法んは一設の
にしり、が銘セ人書で奥青置展島
取たガ東展でんだ士す尻苗し示内
りのラ風示一タつを。地砂ま室の
付でス泊さ寿したさ小区丘しに遺
け、浮地れに方れ山の遺た手跡
ま早球区てともでてさ故跡。作二
し速がのい一、すおん小こり箇
た稻寄制ま老八。りは山のの所
穂贈野す十海、長文揮う看と
のささ。の八洋書く男毫ち板稻
看れんま大翁研の司さ者を穂

看板設置しました

先日札幌で開催された奥尻島災害復興研究会に参加しました。改めて日本の災害史を見直すと、災害をいかに防ぎ、生活するのか、自然界で生きる人間の立ち位置を再認識させられます。奥尻は自然豊かな島ですので、より自然との調和が要求されるのだろうと思います。まずは草刈りと釣り場のゴミ拾いかから始めようかな（エコなしなった）。

新本之記録（編集後記）

井感関ま何らまま示
とじ係ま曜きしり、前月
サまなな日たた。パにの
クしい旅？青。ラたんに
年聞ン一あ
貝。だはとでくク台る
を昼と日聞しと、修の日、
ご飯。馳に羨もれ。山がヤ稻
走。根ま曜て、一梨始り穂
走。かし日
ぶくも気日かり停展

パンクしちゃった！



稲穂燈台（初代）大正期 絵葉書